
鬼神の面。

暁黒狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼神の面。

【Zマーク】

Z9061E

【作者名】

暁黒狼

【あらすじ】

悪さをしたものは殺されると噂される宿、『沙羅双樹』。そこの宿の娘である沙織は、奇妙なちんぢん屋にであう。更新は極めて鈍足。すみません（汗）

「女郎蜘蛛」上

鬼神の面。 「女郎蜘蛛」 上

「あそここの宿、先月死人が出たつてよ。」

「やあねえ……これで何度もよ？」

「また死体は見つかんねえのか。」

「本当は誰も死んでないんじゃないの？」

「いや、でも死体を見たつてやつは大勢いる。」

「何でも、あの宿の悪口を言つたりするとやられるらしいぜ。」

「まじかよ？ じゃあ俺たちも…。」

…またうちの宿の噂だ。

沙織は町の人々をじろりと睨みつけた。

町の人々にとつてはただの話の種に過ぎないのだろう。だが、その宿の主人の娘である沙織にとつては全く面白くない話だった。

『沙羅双樹の怪奇談』。町を歩けば必ず耳にする噂話である。沙羅双樹とは宿の名前で、この町で一番美しい外装をしている。宿のサービスや料理の種類なども豊富で、常連客も多い。

その評判はわざわざ南蛮から来た客もいるほどだった。

しかし、それと同時に恨みを買うことも多かつた。

他の宿から嫌がらせをされることも多かつた。

まだ若い沙織には良く分からぬが、嫉妬心が憎しみやらなにやらになつたのだろうと思つ。

それは成功者につきもの出来事であつて、仕方のないことだ。

そう母から教えられていたから、どんな仕打ちでも我慢できた。

そんなある日。叔父が親睦を深めようと、宿屋『太刀魚』の主人を沙羅双樹に招待した。

太刀魚の主人は大変性格が悪く、町でも悪評が高い。

この宿に嫌がらせをするのも彼が一番酷かつた。

そんな彼でも、流石に美味しい飯と美味しい酒にはかなわなかつたらしい。

沙羅双樹に来て数時間。男はべろんべろんに酔つ払い、上機嫌に鼻歌まで歌つていた。

ああ良かつた。これでうちへの嫌がらせも少しはまともになるだろう。

そう思つた、矢先であつた。

翌日。昼間になつても、男は部屋から現れなかつた。

昨日は随分と飲んでいたしなあ。一日酔いに効く薬でも持つて、起こしに行つてやりなさい。

そう叔父に頼まれ、宿の女将が彼を起こしに行つた。幾つもの階段を上がり、最上階の部屋につく。

「おはようございます。お目覚めは如何でしょうか?」
襖越しに声をかけるも、反応がない。

「旦那様、もう朝ですよ。」

叫ぶくらいの大きさで呼びかける。

尚も反応がない。

「失礼致します。」

痺れを切らした女将が襖を開ける。

否、開けてしまつ。

途端、宿中に悲鳴が広がつた。

何事がと思いかけつけてみると、そこに広がるのは地獄絵図。

辺り一面血飛沫だらけ。生き物の気配はまるで無し。

「何だこの死に方は……とても人の仕業とは思えん……」

この部屋を見た者の第一声は、必ずこれである。

太刀魚の主人は、ただの肉塊となり果てていた。

「で、死体つてのはどこにあんだ?」

「…」、「ここここちらの部屋です…！」

岡つ引きが例の部屋の襖を開ける。

「…なんだ。何もねえじやねえか。」

不思議な事に、その部屋には死体どころか血飛沫すらなかつた。

それ以来、月に一回はこの宿に泊まりに来た者が怪死するようになつた。

狙われるのは金持ちであつたり若い男女であつたり、幼子であつたり。

共通することは、沙羅双樹に仇をなす者や悪さをするもの。と言ふことであった。

犯人を捕まえ様にも、死体や証拠が見つからない。

「れには階お手上げだつた。

(だからと眞つてうちの中に入殺しはいないもん…。)

沙織はむすつとした顔で帰路を歩く。

とんとんからりん。とんからりん。

今日は呉服屋特売デー！赤青黄色の綺麗な着物。

まあや眞つなら今がチャンス！可愛い子にはサービスするよー！

ちんどん屋が軽快なリズムで辺りを賑わしている。

どうやら呉服屋がセールを行つてゐるらしい。

沙織は財布の中身を確認した。

「うん、大丈夫。まだまだある。お使いの帰り道だけど、少し寄つてみようかな。

そう考え、彼女は呉服屋の方へ一歩踏み出した。

どこかで宿泊客が宴会をやつてゐるらしい。

家に帰ると、宿は賑やかな音で満たされていた。

廊下を歩いていると、宴会場と思わしき場所から女将が出てくる。とすつと、襖を閉める音がした。

「あら、沙織ちゃんお帰り。」

彼女は沙織と田代が合つと、柔らかな笑顔で挨拶をしてくる。仄かに、酒の臭いがした。

「今日も宴会？」

「ええ。他のお客様の迷惑になるから、もう少し静かにしてほしいんだけど…。」

何度も言つても聞かなくてねえ。

そう呟き、溜息を吐く。

月に一度くらいは、迷惑な客が必ずいる。

困った話だが、宿代を払つてもらつて以上、無理やり追い出す

わけにもいかない。

しかし、そう言った者たちが

二人は顔を見合わせる。

「いや、まさかねえ。」

「次の犠牲者だなんてことは…。」

「あ、そうだ！今日呉服屋でセールがあつてね！」

ふふふと笑いあい、彼女達はその場を後にした。

しかし、一人の笑顔は翌日には消えることになった。

「知ってるか？昨晩、例の宿で…。」

「ええ？！…また？！…！」

「最近多くねえか…？」

町を歩けば、噂話が耳に入る。
だからと言って、町を歩かぬわけにもゆかぬ。

沙織は憂鬱な気分だった。

今朝彼女の叔父が宴会場へ向かうと、そこには死体の山があつた。

どうやらあの場にいた全員がやられたらしい。

こう何度も人に死なれると、流石に慣れてくるから怖い。

とんとんからからとんからりん。

今日もちろん屋が忙しく太鼓を叩く。

しかし、それは今の沙織にとって耳障りなだけだった。

とんとんからからとんからつん。

(「ねむこ…。）

ふつふつと黒い感情が湧きあがつてくぬ。

今は機嫌が悪いのだ。

そんな陽気な音なんて、 いらない。

とんとんからからとんからつん。

ぐつと拳を握りしめ、 ちんどん屋を睨む。

ああ、 もう本当になんて耳障りな

とん。

その時。 あらゆる音を搔き分け、 その音がやたらひびきと聞こえた。

先ほどのちんどん屋が呟いたものとは違い、 もうと諷とした声だつた。

とん。

まだだ。 また、 太鼓の音だ。

とん。 とん。 とん…。

気がつけば、 彼女は音のする方へと走っていた。

その足音に、呼吸に合わせるかのように、太鼓の音も早く大きくなつて行く。

とん、とん、とん、ととととと…。

町外れの神社まで来たころ、御神木の前で、一人の男が座つているのが見えた。

薄桃色の髪をしており、その瞳は長い前髪で隠れている。服装は極めて派手で、手にはちんどん太鼓を持っていた。

とととん！

沙織が男の前に立つと、一際大きな音で太鼓を叩く。彼が音の正体であった。

「あなたは…？」

彼女は男に問いかける。

今まで俯いていた男が、ゆっくりと顔をあげた。

刹那、一陣の風が境内を駆け抜ける。

風で御神木の枝が揺れ、ざわざわと音を立てた。

その時、男の髪が揺らめき、髪の隙間から隠されていた目が見える。

鬼のような金色の瞳 。

一瞬のことであった。

しかし、あまりにも冷たく冷酷なその瞳に、彼女は背筋が凍るような思いをした。

前髪で隠れているため正確には分からないが、目があつた気がする。

「ちんどん屋だよ。本職はお面屋だけね。」

聞き取れるか聞き取れないかの微妙な音量で、彼はぼそぼそと話した。

正直、沙織にとつては拍子抜けする答えであった。

思わず声が裏返る。

「お、お面屋さんでちんどん屋さん…？」

そう話す彼からは、もつ先程までの異様な気は感じられない。

「俺を呼ぶ時はちんどん屋で良じよ。お面も滅多に売らないし…あ、お面見る？」

優しく問い合わせるちんどん屋。どうやら悪い人ではなさそうだ。

この奇怪な男とその彼が作るお面に興味を持つた沙織は、大きく頷いて見せた。

その様子を見て、彼はそつと懷から面を出す。

途端、沙織は後悔した。

田と鼻に穴があいただけのそれは、ただ木を彫つただけのものでなんの装飾もなかつた。

そう、一言でいえば…。

「で、デスマスク…！」

「やつぱり？みんなそう言つんだよね。」

ちんどん屋はため息をひとつつき、そのお面を懷へしまつ。

余りにも暗い面持ちに、沙織は彼を少しだけ可哀そうに思つた。

「ごめんなさい…えつと…その…別にそれが悪いわけじゃなくて…。」

「余りにもお面が売れなくてちんどん屋とかやつてみたけど…やつぱり駄目でさ。

あれかな。やつぱり俺の性格が根暗だからかな。やつだよな…ちんどん屋なんてどうせ明るい奴がやる仕事だもん。」

突然彼はだらだらと愚痴をこぼし始め、地面にのの字を書き始めた。その姿には、先程まで感じられた恐ろしさまるで無い。

沙織は暫くぽかんと口を開けてつつ立っていた。

この男、性格が暗い割に良く喋る。

「あのー…別にそんなことは」

「陰険に見えるとやっぱり嫌われるもんなんだな。 いまだに宿が取
れてないとかどうよ?」

あれだよ? 今秋でさ、夜になると寒いんだよ? 野宿つて意外とあつ
いんだよ?

何これいじめ? いじめなのかな? ああもう良じよ俺なんて泊める価
値すらないんだろ。」

… 慰めるどころか、話しかける隙さえ「えな」のかしこつは。
流石の彼女もいらっしゃし始めていた。

「… ちんどん屋さん? 結局何が言いたいんですか?」

少し強めの口調で言うと、ぴたりと彼のお喋りが止まつた。
前髪越しに、じりじりといひらを見る。

金色の瞳。

ふと、先ほどの出来事を思い出し、沙織は「くつと睡を飲んだ。

余り妙な事を語つと殺されるかもしねー…。

何故そんな考えに至つたかは知らないが、そんな気がしてならなかつた。

ぱくぱくと心臓がうるさいく音を立てる。

ちんどん屋はやつくつと口を開き、いひ語つた。

「ど、言つ訳ださ。君たちの宿にて泊まらせてくれない?」

「… はー?」

「君の家つて確か、の町でも有名な宿屋なんでしょう? お金だつたら
あるからさ、泊まらせてくれないかな?」

ま、とでも言つよつて、財布をじゅりじゅりと鳴らす。

ここ最近妙な噂話で客も減つてきていた事だし、有り難い申し出
ではある。

しかし本当にうちの宿で良いのか。 やせり宿屋の娘としてきちんと
確認しておかなければならなかつた。

話を聞いたところ。変人ではあるが悪い人ではなさそうだ。

また妙な事件が起こったとき、巻き込まれたら氣の毒だつた。

「噂話は知つてますよね？それでも本当に良いんですか？」

「それでも本当に良いの。そうじやないと俺野宿になっちゃうもん。

「あれだけの噂が立つていても関わらず、つちの宿を選ぶとは。もの好きな客もいるものである。

沙織はすっと背筋を伸ばし、凜とした声で言つた。

「ではご案内いたします、お客様。」

「ちんどん屋は短く「有難う。」と言つや。

あまりにも素直に言つたので、彼女は思わず笑みをこぼした。

夕暮れ時。

ひたりひたりと、夜が近づいていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9061e/>

鬼神の面。

2010年10月21日20時15分発行